

朝鮮後期の慶尚道における邑城の立地特性と 空間構造に関する研究

金暲完¹・仲間浩一²

¹学生会員 工修 九州工業大学大学院工学研究科（〒840-8550北九州市戸畑区仙水町1-1）

E-mail:comboys70@yahoo.co.jp

²正会員 工博 九州工業大学 工学部（〒840-8550北九州市戸畑区仙水町1-1）

E-mail:knakama@civil.kyutech.ac.jp

本研究は、朝鮮後期の慶尚道における邑城築造の計画原理と空間構造対しての研究結果を分析して、邑城(upsung=城郭)の立地特性と邑城内部の施設の配置を調べ、空間構造を確認することを目的とする。

研究の結果、慶尚道における邑城の空間配置は、風水地理と儒学の理論である考工記による左祖右社・面朝後市の基本法則が適用されていることが確認された。

現在、その痕跡が確認できる邑城は、高麗時代後期から朝鮮時代に築造されたもので、同時の各地方の地域性をもっている。本研究の知見は、韓国の伝統的な地方都市の特性を理解するのに役立つと考えられる。

Key Words: Up-sung, location, Spatial Structure, Kyungsang-Do, the later of Chosun Dynasty

1. 研究の目的と位置付け

邑城(upsung=城郭)の起源は、中国の夏王朝期に私有財産を保護するために形成されたものである。殷王朝になるとその形態が確立され、隋・唐王朝になると邑城形式が整形化されたと言われている。¹⁾

韓国での邑城の起源は確実ではないが、韓国の三国時代(高句麗・百済・新羅)、邑城は王城ではなく、地方の中心地にあった文化・行政・経済・軍事の中心である城郭を示す概念であると考えられる。²⁾

統一新羅時代には、9州5小京が地方の中心になっており、王京の都市計画は唐の長安城をモデルに採択し、秩序精練な坊里で区画されていた。邑城は、その機能が都市を防御する目的と保民用に使用するために築造されたもので、中国式邑城に近似した城郭と言える。³⁾

一方、高麗と朝鮮時代を経て築造された邑城は、ほかの時代と異なり邑城と山城の区分が明確であり、当時の各地方の文化・行政・経済・軍事の中心地と

して、当時の社会制度、知識層と支配層の思想が邑城の空間構成に強く作用している。

現在、その痕跡が確認できる邑城は、高麗時代後期から朝鮮時代に築造されたもので、当時の各地方の地域性をもっている。

これまでの韓国の邑城に関する先行研究は、大きく邑城の歴史に関する研究、地方都市(邑城)全般に関する研究、個別的な地方都市(邑城)に関する研究、邑城内部の施設に関する研究の四つに分けることができる。

邑城の歴史に関する研究には、朴泰祐³⁾・李愚鐘⁴⁾・車勇杰⁵⁾などの研究がある。

地方都市(邑城)全般に関する研究としては、李相球⁶⁾・白寅吉⁷⁾・朴帝用⁸⁾・金哲洙⁹⁾・崔童植¹⁰⁾などの研究がある。

個別的な地方都市(邑城)に関する研究には、沈正輔²⁾・芮明海¹¹⁾・金暲完¹²⁾などの研究がある。

邑城内部の施設に関する研究としては、姜圭敗¹⁾・李達勲¹³⁾・金童植¹⁴⁾などの研究がある。

本研究は、先行研究の結果を踏まえて、日本の朝

2. 研究の対象と方法

行政区域は、高麗時代1京3牧3府30郡であり、1京は東京、3牧は慶州・晋州・尚州で、3府は甫城・京山・安東であった。



その他に、新增東国輿地勝覽¹⁷⁾と輿地図書¹⁸⁾を参考資料とした。

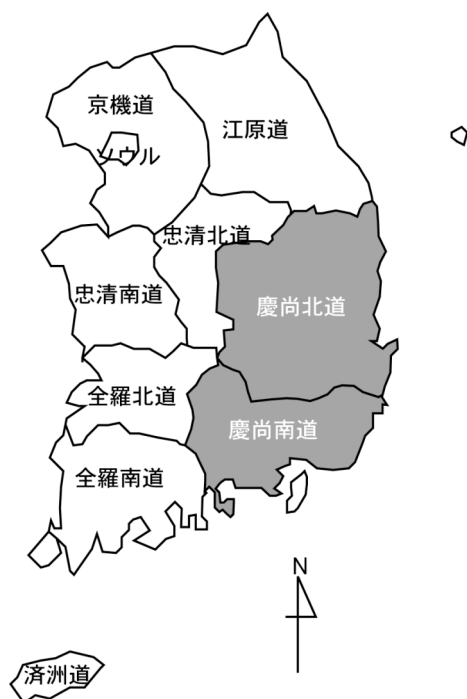


図-1 慶尚道の位置（筆者作成）

3. 邑城の規模と立地特性

慶尚道地域における邑の規模と邑城の規模は、「慶尚道邑誌」にある「戸口」と「城池」の項目から抽出した。

「城池」の項目には、邑城の規模に加え、築造の材料と築造の時期と移転・新築・増築の時期が記述されている。他にも城門の数、方向・門の名前、井と池の存在有無と位置・規模・数が記録されている。以下の項目を整理して示したのが表－1である

表－1 邑と邑城の規模と特性

邑名	戸数 (戸)	人口 (口)	邑城周 (尺)	邑城高 (尺)	材料	築城時期	門の方向	邑城の 形態	邑城の 位置
1 慶州府	18,222	73,051	2,075	12	石	1378年	東西南北	□	海岸
2 尚州牧	17,877	65,035	3,888	9	石	？年	東西南北	○	陸地
3 星州牧	11,944	52,082	7,550	8	石	1520年	東西南北	非対称	陸地
4 安東大都護府	9,227	45,263	4,425歩	8	石	1592年	東西南北	？	陸地
5 昌原大都護府	7,190	29,509	2,004	？	石	1408年	東西南北	○	海岸
6 大丘都護府	13,194	56,962	2,124歩	24	石	1736年	東西南北	○	陸地
7 東萊都護府	7,190	32,158	17,291	17	石	1731年	東西南北	○	海岸
8 善山都護府	7,372	37,107	4,448	8	石	1732年	東西南北	○	陸地
9 漆谷都護府	3,835	15,153	4,710	？	石	？年	東西 北	非対称	陸地
10 金海都護府	6,632	24,138	4,000	11	石	1434年	東西南北	○	海岸
11 寧海都護府	2,503	8,658	1,278	13	石	1394年	東西南北	？	海岸
12 密陽都護府	8,303	33,142	4,670	？	石	1479年	東西南	○	陸地
13 咸陽郡	4,670	24,698	735	11	石	1729年	東西南	○	陸地
14 永川郡	8,227	33,015	1,902	？	？	1592年	東西南北	非対称	陸地
15 清道郡	7,351	32,610	1,403	？	？	1590年	東西 北	□	陸地
16 興海郡	3,555	12,090	1,493	13	石	1389年	南北	○	海岸
17 梁山郡	2,079	12,178	3,710	13	石	1492年	？	？	海岸
18 咸安郡	4,699	21,021	7,003	13	石	1510年	東 南北	○	海岸
19 昆陽郡	3,686	15,272	3,765	12	石	1430年	東 南北	非対称	海岸
20 慶山縣	3,025	14,272	1,200	10	石	？年	東西南北	□	陸地
21 南海縣	3,429	15,634	2,876	13	石	1459年	東西南北	○	海岸
22 迎日縣	3,989	18,558	2,940	12	石	1747年	？	？	海岸
23 長鬐縣	2,239	8,531	2,980	10	石	1011年	東西	○	海岸
24 靈山縣	3,526	17,423	3,810	12	石	1593年	？	？	陸地
25 漆原縣	3,100	13,019	1,595	11	石	1413年	？	？	陸地
26 鎮海縣	1,245	3,885	446	9	石	1414年	東西南	○	海岸
27 泗川縣	3,313	14,620	5,015	10	？	1445年	東西南	○	海岸
28 機張縣	2,687	10,701	3,197	12	石	高麗	？	？	海岸
29 三嘉縣	3,085	17,821	3,259	9	石	1567年	東西南北	○	陸地
30 熊川縣	3,096	15,751	3,514	15	石	1439年	？	？	海岸
31 宜寧縣	6,844	29,565	1,570	4	？	1567年	？	○	陸地
32 清河縣	1,712	6,673	1,353	9	？	1432年	東西	？	海岸
33 彦陽縣	1,224	10,961	3,064	14	石	1500年	東西南北	□	陸地

（１） 邑城の分布

慶尚道地域における邑城の分布状態を調べるために、全国的に分布された邑城の状態が記録されている文献を参照し、行政単位別の分布状態と立地を確認して示したのが表－2である。

表－2 道別の邑城の分布数

道名	新增東国輿地勝覧	輿地図書	慶尚道邑誌
咸鏡道	17	16	
平安道	12	14	
黄海道	8	4	
江原道	9	0	
京畿道	1	3	
忠清道	17	13	
全羅道	30	19	
慶尚道	33	35	33
合計	127個	104個	33個

表－2に示したように、道別邑城の分布状態を見ると「新增東国輿地勝覧」（1530年）には、127個の邑城が記録されており、「輿地図書」（1765年）には104個が記録されている。このように各文献から見られる邑城の数が異なるのは、各文献が編纂された時期が異なるためである。戦乱による邑城の破壊と新築、邑治の移転によって邑城がなくなる場合などがあったと推測される。

次に分布を見ると、国境地域である咸鏡道・平安道・全羅道・慶尚道に約80%の邑城が存在することがわかる。これは、邑城が軍事的な役割を果たしていることを示していると推測される。表－2に示したように慶尚道は、道別分布数を見ると全国で一番多い邑城が存在していたことをわかる。

表－3 慶尚道における行政単位別の邑城数

行政単位	新增東国輿地勝覧	輿地図書	慶尚道邑誌
府	1	1	1 (1)
牧	2	2	2 (3)
大都護府	2	2	2 (2)
都護府	8	7	7 (14)
郡	4	6	7 (13)
縣	16	18	14 (38)
合計	33	35	33 (71)

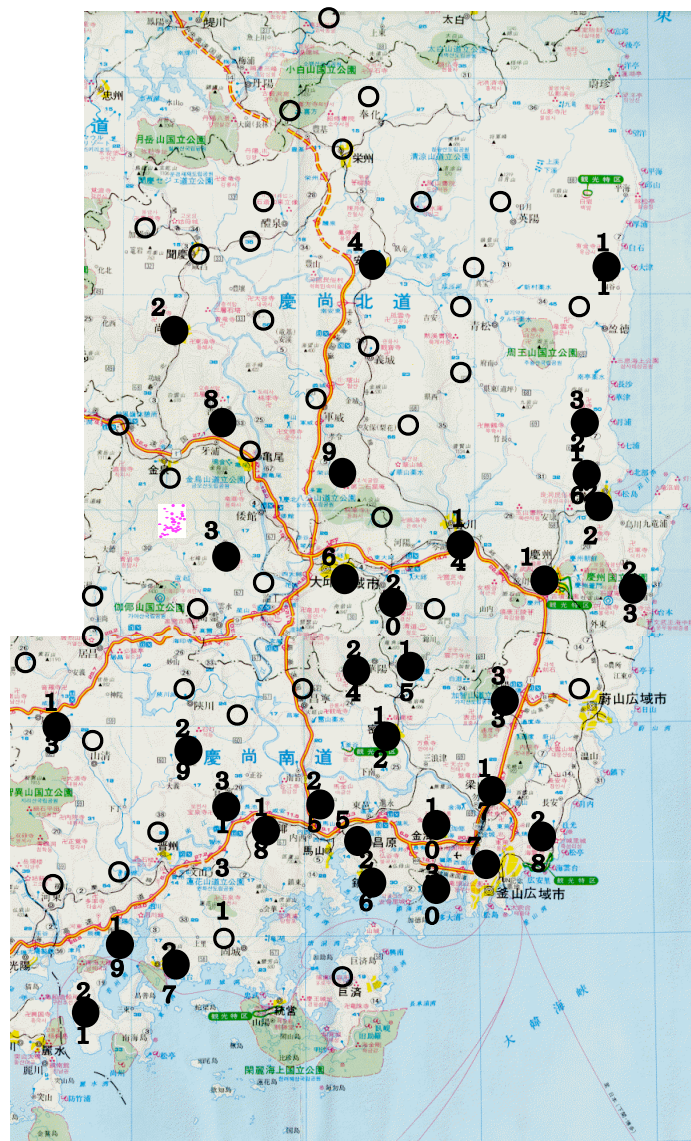
（）のなかの数は、本来の行政の数

慶尚道における邑城を行政区分毎に整理したもの

が表－3である。

表－3に示したように、邑城は都護府以下の行政単位に多く存在するが、比率としては、行政単位が上になる程、保有比率も高くなる傾向があることが判明した。

邑城の位置を地図に示したのが図-3である。



●：邑城がある都市、○：邑城がない都市

図－3 慶尚道の邑城位置（道路地図を元に筆者作成）

「慶尚道邑誌」の記録と図-3を見ると、海岸に隣接している18邑の中、15邑が邑城を持っているのに対し、陸地の53邑の中には、18邑しか邑城が存在していない。陸地にある邑城も海岸に近いところにあるか、行政・商業的に重要なところにあることがわかった。

（２） 邑の規模と邑城の規模

表-1を参考にして、邑城の規模を小規模邑城（2,000尺以下）と中規模邑城（2,000～4,000尺）、大規模邑城（4,000尺以上）の三つに分類したのが表-4である。

表—4 邑城の規模（周囲）

邑城の規模	邑城数	比率（％）
2,000尺以下	10	30％
2,000～4,000尺	13	40％
4,000尺以上	8	24％
その他	2（安東・大丘） （単位が歩）	6％
合計	33	100％

表—4に示したように、中規模邑城の邑城が一番多いことがわかった。邑の規模が大きくなると邑城と大きくなる傾向がある。しかし、表-1と図-3を参照すると、海岸近くにある邑城は、邑の規模に対して大きいである。その理由として、邑城は本来防御の目的が強く、日本の朝鮮出兵のあと増築されたことを挙げられる。

邑城の規模を高さで分類して見ると表-5である。

表—5 邑城の規模（高さ）

邑城の規模	邑城数	比率（％）
5尺以下	1	3％
6尺～10尺	10	30％
11尺～15尺	15	46％
16尺以上	2	6％
？	5	15％
合計	33	100％

邑城の高さは、10尺～15尺の間が一番多く分布している。5尺～15尺に範囲を広げると大抵の邑城がこの範囲に存在する。それで、慶尚道地域における邑城の高さは、5尺～15尺であることが判明した。

（３） 邑城の形態

「慶尚道邑誌」を調べた結果、邑城はすべて石で築造されていたことが判明した。しかし、初めから石で築造したということではなく、土で築造したものを石で直したこともある。常、朝鮮後期に新築された邑城は、初めから石で築造された。

表—6 門のパターン分類（李相球の研究を基に筆者作成）

門の数	門の方向	邑城の数	タイプ
4	東西南北	15	I
3	東 西 北	2	II-1
	東西南	4	II-2
	東 南北	2	II-3
2	南北	1	III-1
	東西	2	III-2
合計		26	

李相球の研究で用いると邑城の門を分類することができる。慶尚道では、6種類に分類することができた。

分類の結果、邑城にある城門は、東西南北の四つの門をもつのが多いことが判明した。また、邑城の規模が大きいところは四つの門をもつ傾向も見られた。邑城の規模が小さいところは、門が二つしかない場合もある。

邑城の形態も、「慶尚道邑誌」を元に判断を行った。結果、邑城の平面形態を大きく円型・方型・非対称の三つに分類したのが表—1である。

円型は、邑城が風水地理説の影響を受けたことを示しており、方型は中国邑城の影響を受けたことを示している。¹⁾ 慶尚道からは、半分程度（16邑）の邑城から円型が確認された。これにより、朝鮮後期の慶尚道地域には風水地理説の影響があったと推測される。

4. 邑城の空間構造

邑城には、いろんな施設が配置されている。その中には、ある規範に従って配置されたと思われる施設がある。

先行研究の姜圭敗、李相球、金哲洙、芮明海などによると‘客舎’が、邑城の施設の中で一番重要であることがわかる。‘客舎’の本来の機能は中央から来る官吏が泊まる場所である。また、‘客舎’は国王を象徴するため、格を高めた施設である。「慶尚道邑誌」の方向と距離の記述は大抵、客舎のものが中心である。客舎を中心とし、慶尚道における邑城の重要施設の位置を示したのが表—7である。

表—7 邑城の重要施設の位置

邑 名	鎮山	郷 校	社稷壇	文廟	成隍壇	厲壇	先農壇	邑市
1 慶州府	狼山 東3里	南3里	西2里	郷校		北4里	東5里	有
2 尚州牧	天峯山 北9里	南5里	西5里		南7里	西北3里		有
3 星州牧	印縣山 北9里	東3里	西5里	郷校	城中			有
4 安東 大都護府		北	西2里		東6里 南5里	北5里	東2里	有
5 昌原 大都護府		西10里 →東1里	西2里	郷校	北1里	北1里		有
6 大丘都護府	連龜山 南3里	東2里	西7里	郷校	南2里 連龜山	北8里		有
7 東萊都護府	輪山 北8里	城中→ 西城外	西5里	郷校	東城内	東北5里		有
8 善山都護府		北2里	西10里		西3里	北5里		有
9 漆谷都護府		北1里	北1里		北 玉女峰	南		？
10 金海都護府	盆山 北3里	東2里	西2里	北：主松岳 山下	東4里	北6里		有
11 寧海都護府	騰雲山（本府）北10里 東海山（東海）東4里	東2里	西2里		南1里	北5里		
12 密陽都護府	華嶽山 北19里	北5里	北7里	郷校	東5里	北5里		有
13 咸陽郡		北3里	西2里		東3里	北2里		有
14 永川郡	母子山 北90里	文廟	西2里	北2里	南5里	北5里		有
15 清道郡	鰲山 南2里	東	西3里		南3里	北2里		有
16 興海郡		西2里	西2里	西2里	南2里	北2里		有
17 梁山郡	城隍山 東5里	東→ 西5里	西5里	西5里	東5里	北5里		
18 咸安郡	餘航山 南15里	南3里	西1里		南6里	北3里		
19 昆陽郡	銅谷山 北13里	東1里	西2里	郷校	南2里	北2里		
20 慶山縣		南2里	西7里		東3里	東3里		
21 南海縣		北2里	西2里		南1里	北2里		有
22 迎日縣	雲梯山 南15里	南10里	西5里	郷校	南10里	北10里		有
23 長鬐縣	巨山 西2里	東2里	西3里	郷校	南5里	北2里		有
24 靈山縣	靈鷲山 東北7里	北1里	西1里		南3里	北2里		有
25 漆原縣	青龍山 東7里	西	西2里	郷校	東1里	北2里		有
26 鎮海縣	鰲山 北5里	東2里	西2里	東2里	南5里	北5里		有
27 泗川縣	浮蜂山 東5里	東3里	南3里		南4里	南2里		有
28 機張縣	炭山 西2里	東5里	南2里		北5里	北7里		有
29 三嘉縣		西2里	西3里	郷校	北7里	北3里		有
30 熊川縣		北1里	西2里		南2里	北2里		有
31 宜寧縣	徳山 北5里	西外	西5里		城東外	北5里		
32 清河縣	呼鶴山 西7里	北1里	西7里		東1里	北5里		有
33 彦陽縣	高？山 北10里	北2里	西北		北7里	北7里		有

（１）教育施設

朝鮮時代の教育制度として、ソウルの成均館と四学、地方都市の郷校がある。郷校は一つの邑に一つずつ設立されており、儒学の配置規範に従って、儒学の理論である考工記による左祖右社・面朝後市の基本法則が適用されていた。孔子などの儒学者を祭るための文廟が設置されていることから、邑の東に位置するのが一般的である。しかし、慶尚道には東ではなく北の方面に多く見られるが、これは朝鮮後期の儒学の規範より、風水地理説の影響を受けたためである¹⁾との説がある。

（２）祭祀施設

祭祀施設には、社稷壇・文廟・成隍壇・厲壇などがある。

社稷壇とは、王朝の象徴物として祭壇を設置した。邑の西の方面に設置した。慶尚道には、漆谷・泗川・密陽・機張、四つの邑以外には西に設置されている。

文廟は、孔子などの儒学者を祭るところで、中央には成均館、地方には郷校にあった。考工記によると邑の東に配置するのが基本である。

成隍壇は、成隍神を祭祀する施設である。成隍神とは、邑の守護神で「国都州府郡縣鎮山」の神を言うことである。成隍壇は邑または町の鎮山に位置しているか、もしくは厲壇がある北を避けて東西南にあると言われている。⁶⁾ これは、民間信仰の影響であると考えられる。

しかし、「慶尚道邑誌」を調べた結果、鎮山に位置していない邑や、北に位置している邑が存在した。（表－7）

厲壇は、祭祀をしてくれる人がいない魂を祭祀する施設で邑の北にあることが基本である。漆谷（南）・慶山（東）・泗川（南）以外は北に位置している。（表－7） これらも民間信仰の影響であると考えられる。

先農壇は、農事に関連する祭祀を行う施設である。これは慶州と安東の二邑しか存在しないことがわかった。（表－7）

（３）商業施設

朝鮮時代の地方都市における商業は、ほとんど定期市である場市（Chang-Si）に依存していた。

場市とは、一定な場所で商人と住民が集まって交易を行うところである。邑には一つ以上の市場が存

在した。

慶尚道における市場は、邑の規模が大きくなると数も増える傾向があることが判明した。（表－7）

5. 結論

「慶尚道邑誌」を中心に、「新增東国輿地勝覽」と「輿地図書」を参考資料とし、慶尚道における邑城の立地特性と空間構造に関して調べた。

結果を、要約すると次の通りである。

1) 国境地域である咸鏡道・平安道・全羅道・慶尚道に約80%の邑城が存在することがわかる。これは、邑城が軍事的な役割を果たしていることを示していると推測される。

2) 邑城は都護府以下の行政単位に多く存在するが、比率としては、行政単位が上になる程、保有比率も高くなる傾向があることが判明した。

3) 海岸に隣接している18邑の中、15邑が邑城を持っているのに対し、陸地の53邑の中には、18邑しか邑城が存在していない。陸地にある邑城も海岸に近いところにあるか、行政・商業的に重要なところにあることがわかった。

4) 邑城にある城門は、東西南北の四つの門をもつのが多いことが判明した。また、邑城の規模が大きいところは四つの門をもつ傾向も見られた。

5) 慶尚道からは、半分程度（16邑）の邑城から円型が確認された。これにより、朝鮮後期の慶尚道地域には風水地理説の影響があったと推測される。

6) 慶尚道からは、郷校の位置が北の方面に多く見られる。これは朝鮮後期になると儒学の規範より、風水地理説の影響を受けたと推測する。

7) 社稷壇は、慶尚道では、漆谷・泗川・密陽・機張、四つの邑以外には西に設置されている。

8) 成隍壇、慶尚道では鎮山に位置していない邑と、北に位置している邑が存在した。

9) 厲壇は、漆谷・慶山・泗川の以外は北に位置している。民間信仰の影響であると考えられる

10) 慶尚道における市場は、邑の規模が大きくなると数も増える傾向がある。

以上により、慶尚道における邑城の空間配置は、風水地理と儒学の理論である考工記による左祖右社・面朝後市の基本法則が適用されていることが確認された。

参考文献

- 1) 姜圭啟、邑城の公共施設配置規範に関する研究－忠南地方の14個邑城を中心に－、大田大大学院修士論文、2000
- 2) 沈正輔、韓国邑城の研究、学研文化社、1995
- 3) 朴泰祐、統一新羅時代の地方都市に対する研究、忠南大学大学院修士論文、1987
- 4) 李愚鐘、中国と韓国の都城の計画原理と空間構造の比較に関する研究、大韓建築学会論文集、1994
- 5) 車勇杰、高麗末・朝鮮前期対倭関防史研究、忠南大学大学院博士論文、1988
- 6) 李相球、朝鮮中期邑城に関する研究、ソウル大大学院修士論文、1989
- 7) 白寅吉、朝鮮時代邑城の立地よる特性に関する研究、ソウル大大学院修士論文、1989
- 8) 朴帝用、風水地理説の思想的背景と都市形成の影響に関する研究、1989
- 9) 金哲洙、韓国城郭の形成、発展過程と空間構造に関する研究、弘益大大学院博士論文、1984
- 10) 崔童植、絵図描写に見る李朝期全羅道の城郭都市の立地及び城郭形態に関する風水地理的研究－実測地形図との比較－、日本都市計画学会・都市計画228、2000. 11
- 11) 芮明海、朝鮮時代の空間構成に関する研究、大韓建築学会論文集計画系18巻7号、2002. 7
- 12) 金暲完、朝鮮時代の風水からみた町の空間認識と対応方式に関する研究、土木計画学研究論文集 Vol. 21 no. 2、2004. 9
- 13) 李達勲、朝鮮時代郷校建築の様式に関する研究、大田大産業技術研究所、1999
- 14) 金童植、清州邑城官衙公庁の規模と位置に関する研究、清州大大学院修士論文、1999
- 15) 慶尚道邑誌（1823年）、亜細亜文化社、1982
- 16) 韓国の古地図（慶尚道－海左勝覧）、嶺南大学教博物館、1998
- 17) 韓国学文献研究所：新增東国輿地勝覧（1530年）、亜細亜文化社、1983
- 18) 輿地圖書（1765年）、国史編纂委員会、1979